

学んだ農業現地へも

青年海外協力隊候補生 研修終了報告会

開発途上国を支援する国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊の候補生らが、富岡市の5軒の農家に4月から半年間住み込み、実践訓練を終えた。このほど、農業研修の最終報告会を開いた。帰国後、富岡で農業をしたい、農家に嫁ぎたいと決意した候補生もいる。

「帰国後富岡へ」の声も

ソロモン諸島に派遣予定の1、2時間の昼寝は、大川原重昭さん(28)と体調を整えることも必須。東京農大卒のJA要と感じた甘藷富岡青年相模協議会地域の農家や農協との研修を受けた。朝7時が大切さも学んだ。ソロモから1時間の除草作業を学ぶ。1時間の大切さを学ぶ。交流して信頼につけた。



「タマアネギの夢を見るくらいになりました」などと話す候補生のひとりと、馬庭真由子さん＝富岡市で

モザンビーク共和国に派遣予定の高野一馬さんは(24)日大卒は、加部孝志さん方で研修。仕事に手を抜かない姿勢や人付き合いを学んだ。「現地の人とよく話して理解を深めたい」と話す。富岡出身だが、帰国後は富岡で農業をしたいと夢を描く。白石さんは「タマアネギ一つをとっても町の農家があれは普通の作り方がある。うちはそのた

と意見交換したことは、いことだと研修生を受け入れた感類を述べた。甘藷富岡地域を拠点に国際協力や農業活動などをしているNPO法人「自然塾寺屋」が主催と農家を仲介した。寺屋の矢島亮二理事長(28)はこの研修を受け入れ、農家の刺激になり、地域興しにつながってほしいと話す。